

SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★

アントワン・フィッシャー ／きみの帰る場所

配給／20世紀フォックス（関東）映画会社

2003（平成15）年5月5日鑑賞

Data

監督：デンゼル・ワシントン

出演：デレク・ルーク／ジョイ・ブ
ライアント／デンゼル・ワシ
ントン

みどころ

アントワン・フィッシャーとは実在の人物の名前。孤児院で育ち、里親から虐待を受けた黒人の少年フィッシャーが家族捜しに立ち上がり、「帰る場所」を見つけるといふ感動的ストーリー。そしてそれを助けるのが俳優でもあり、監督であるデンゼル・ワシントン。地味だが、人間の優しさや家族の大切さをあらためて教えてくれる佳作だ。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

<デンゼル・ワシントン初の監督作品>

毎年のように話題作に出演し、最新作『ジョンQ—最後の決断』（2002年）でも、すばらしい演技を見せたデンゼル・ワシントンは2度のアカデミー賞に輝く名優中の名優。中でも『マルコムX』（1992年）は、すばらしい熱演で大感激したものだ。そのデンゼル・ワシントンが自ら出演するとともに、初めて監督として製作したのがこの映画だ。

<原作は2001年のベストセラー>

タイトルのアントワン・フィッシャーとは、実在する人物（黒人）の名前。アメリカ海軍に11年間勤務、連邦刑務官として3年間勤務した後、ソニー・ピクチャーズ・スタジオの警備員となったアントワン・フィッシャーが、自らの物語を書き綴った回顧録がこの映画の原作だ。その物語は、孤児として生まれ、里親の手によって虐待されるという逆境の下で育ったことによって、精神的に多くの不安を抱えていた主人公が、一人の精神科医とめぐり合うことによって立ち直り、自らの家族捜しに立ち上がり、「帰る場所」にたどりつくという感動的なものだ。

そしてこの回顧録、「Finding Fish:a memoir」(邦題「きみの帰る場所／アントワン・フィッシャー」)は、2001年のベストセラーになった作品とのことだ。

<ブラックの俳優陣3人の演技はさすが>

主人公アントワン・フィッシャーを演ずるのは、デンゼル・ワシントンが見出した新人俳優デレク・ルーク。結構ハンサムな顔立ちで、今後人気沸騰の可能性あり。

その支えとなるガールフレンドのシェリルを演ずるのはジョイ・ブライアント。これもいい味を出している。そしてフィッシャーがめぐり合う精神科医ジェローム・ダヴェンポートを演ずるのがデンゼル・ワシントンだ。

人の悩みを聞くのが専門の精神科医だが、それにとどまらず知的であたたかい。そしていかにも意志力の強い立派な、申し分のないキャラクターをもつ医師の役だ。ダヴェンポートは根気よく、フィッシャーの話を聞き出した。そしてフィッシャーへアドバイスを送り続け、ガールフレンドとの交際で自信をつけたフィッシャーに対して、勇気を持って家族捜しの旅に立ち上がるよう促した。

しかし、他方ダヴェンポートも強いばかりの人間ではなかった。フィッシャーに対してアドバイスを送り続けるダヴェンポートの足元も……。そう、フィッシャーに対してアドバイスを送り続けたダヴェンポート自身も立派な精神科医の顔だけではなかった。彼自身も冷えた妻との関係に悩み、その悩みを内に秘めたまま、誰にも打ち明けられず、フィッシャーと同じような苦悩をもっていたのだった。

<感動的なストーリー・・・だが・・・>

映画は「謝肉祭」で始まり、「謝肉祭」で終わる。すなわち、子供時代のフィッシャーが夢にみた「謝肉祭」のシーンが、家族捜しの旅に赴いて「帰る場所」を見つけたところで本当に実現することになるのだ。しかも、そこには最愛の妻になるはずのシェリルもいた。

そして映画のラストシーン。フィッシャーから感謝の言葉を述べられたダヴェンポートは、自分もフィッシャーから学ぶことができたし、「そのおかげでいい夫でいようと努力しているんだ」と率直な言葉を口に出し、お互いへの感謝の気持ちを確かめるところで終わる。

このように映画は全体としてよくできており、感動的。しかし何となく物足りない。これは多分、ガールフレンドとの出会いや家族捜しの話が「出来すぎている」こと、そしてあまりにもダヴェンポートとフィッシャーとの対話による表現が多すぎることによるのではないかと思う。

その意味で、俳優デンゼル・ワシントンの出来は100点満点だが、監督デンゼル・ワシントンとしては、まだまだ出発点に立ったばかりで、せいぜい60点か・・・？

2003(平成15)年5月6日記